

水木しげる作品にみる民間伝承の利用と潤色

蛸 島 直

キーワード：水木しげる、妖怪、民俗学、民間伝承

はじめに

2015年11月30日、漫画家水木しげるが93年の生涯を閉じた。「ゲゲゲの鬼太郎」はあまりに有名で、2018年4月には、アニメ化50周年を記念して、第6シリーズの放送が開始されている。視聴者も3世代以上に及ぶことになり、この間、多くの日本人の妖怪観に少なからぬ影響を与えてきたといえよう。水木は、日本民俗学会の会員でもあり、その作品の多くは、実際の民間伝承や民俗学の文献に取材している。また、幼少期の水木（本名：武良 茂）は、武良家に出入りしていた「のんのんばあ」から、妖怪を初めとする民間伝承を聞かされ、その影響は頗る大きかった。さらに、水木自身、小学生の時に妖怪「べとべとさん」に出会い、小学校高等科では「ひだる神」に類した体験を、また、1944年、22歳で死の淵をさまよったニューギニアで、「ぬりかべ」に似た妖怪に遭遇したと語っている。

水木作品の素材は、①自らの体験、②自ら聞き取った情報、③民間伝承に関する先行研究、④妖怪画、⑤その他、に分類できそうであり、プロダクション制の導入以降は、③と④の比重が増したものと考えられ、②については、後年海外にもフィールドを拡大している。

水木は、実に多作であり、創作した妖怪に加え、民間伝承上の多くの妖怪を視覚化させたが、一方で、何作もの作品に同じ妖怪を登場させている。その描き方、あるいは潤色の仕方は作品や版ごとに異なりがちでもある。後述するように、水木は「妖怪は、昔の人が残した遺産だから、その型を尊重し、後生に伝えるのがよい」「創作されるべきものではないと思う」[1974：17]¹⁾などと述べているが、ときに、かなりの文飾や創作が加えられているようである。

筆者の関心は、水木作品において、どこまで民間伝承が尊重され、また、民間伝承にどれだけ文飾や潤色あるいは創作が加えられているのかという点にある。以下、水木の人生史と民俗学との関係を簡潔に振り返り、続いて、「のんのんばあ」こと景山ふさと

の関係に注目し、彼女から水木が聞き取ったという諸妖怪とその記載の仕方を整理し、情報源について再考する。さらに、水木自身の体験ともかかわる「ひだる神」「べとべとさん」「ぬりかべ」の記述について、作品間の比較を行い、出典の推測と改変・潤色の度合いについて検討したい。

1. 水木しげるの人生史と民俗学

水木の自伝的作品

水木には、多数の自伝的作品があるが、ここで、それらを刊行年順に挙げてみよう。本稿で用いる資料のほとんどはこれらからの引用によるものである。

- ① 『のんのんばあとオレ』（小説版）1977年 ちくま少年図書館
- ② 『ほんまにオレはアホやろか』 1978年 ポプラ社
- ③ 『ねぼけ人生』 1982年 筑摩書房
- ④ 『水木しげる 昭和史』 1988～1989年 講談社
- ⑤ 『のんのんばあとオレ』（漫画版）1992年 講談社
- ⑥ 『水木しげるのラバウル戦記』 1994年 筑摩書房
- ⑦ 『トペトロとの50年』 1995年 扶桑社
- ⑧ 『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』全6巻 2001年 講談社
- ⑨ 「私の履歴書 水木しげる」『日本経済新聞』（2003年8月1～31日）
- ⑩ 『水木さんの幸福論：妖怪漫画家の回想』2004年3月 日本経済新聞社
- ⑪ 『完全版 水木しげるの伝』上・中・下2004～2005年（上記8を再編集）
- ⑫ 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふうに生きてきた』 2004年12月 大和書房

①『のんのんばあとオレ』小説版と⑤同漫画版では、タイトルはまったく同じであるものの、内容は大きく異なっている。また、『日本経済新聞』に連載された⑨「私の履歴書 水木しげる」は、翌年⑩『水木さんの幸福論』に同じく「私の履歴書」として再掲されているが、そこにも大幅な加筆が認められる。④『水木しげる 昭和史』は、漫画による昭和史ではあるが、随所に自身や家族の人生史を散りばめている。その一部は、⑧『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』に再掲され、さらに、同書全6巻は、⑪『完全版 水木しげるの伝』全3巻に再編集されている。以上のような事情から、作品間の関係は複雑であり、比較にはそれなりの注意が必要となってくる。

水木しげるの年譜と民俗学

水木の民間伝承への関心や民俗学との関係を把握するために、水木の年譜を整理しておきたい。水木の年譜としては、関東水木会・平林重雄編による労作「水木しげるの詳細年譜」があるが〔関東水木会・平林重雄編 2005〕、以下は、同年譜からの一部抄出に、

民俗学や文化人類学関連の事項を筆者が追加して作成したものである。

大正11年（1922）：0歳。3月8日、父武良亮一、母琴江の次男として大阪府で誕生（本名：武良茂）。

生後1か月で鳥取県境港市の父の実家に帰郷。のんのんばあ（景山ふさ）に可愛がられ妖怪や民間伝承への関心を強くする。

昭和4年（1929）：7歳。1年遅れて境尋常小学校入学。

昭和8年（1933）：11歳。病床ののんのんばあを見舞い、最後の別れとなる。

昭和10年（1935）：13歳。境小学校高等科に進学。画才を認められ、個展を開催。

昭和13年（1938）：16歳。大阪の精華美術学院に入学。その後、受験、進学、退学、進学を繰り返す。

昭和18年（1943）：21歳。夜間中学3年で召集。鳥取連隊に入営。激戦地ラバウルに送られる。

昭和19年（1944）：22歳。敵襲から一人生存し、ジャングルをさまよう。マラリアの病床で空襲に遭い左腕を失う。

昭和21年（1946）：24歳。帰国。左腕の再手術のため入院。

昭和23年（1948）：26歳。武蔵野美術学校に入学。

昭和25年（1950）：28歳。神戸市兵庫区水木通りで、ペンネームの由来となるアパート「水木荘」を経営。

昭和41年（1966）：44歳。調布の自宅に水木プロを設立。

昭和42年（1967）：45歳。雑誌『ガロ』に『鬼太郎夜話』連載開始。『墓場の鬼太郎』を『ゲゲゲの鬼太郎』と改題して『週刊少年マガジン』に新連載開始。

昭和43年（1968）：46歳。アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』放映開始。『週刊サンデー』に『河童の三平』連載開始。

昭和48年（1973）：51歳。日本民俗学会に入会。『総員玉砕せよ！！：聖ジョージ岬・哀歌』刊行。

平成7年（1995）：73歳。「世界妖怪協会」の前身たる「妖怪人類学会」を結成。

平成8年（1996）：74歳。「世界妖怪協会」結成。境港で「第1回世界妖怪会議」開催。

平成9年（1997）：75歳。世界妖怪協会公認・季刊『怪』第零号刊行。私費による文化人類学者等への奨励金、世界妖怪協会賞を設ける。

平成11年（1999）：77歳。日本民俗学会評議員となる。

平成15年（2003）：81歳。境港市に「水木しげる記念館」開館。旭日小綬章叙勲。「神秘家列伝 柳田国男」を『怪』14巻に掲載。

平成20年（2008）：86歳。小学館の『ビッグコミック』に『水木しげるの遠野物語』を連載開始。

平成22年（2010）：88歳。遠野市、「『遠野物語』100周年記念事業」オフィシャルサポートキャラクターに水木描く「かたるくん」を採用。

平成27年（2015）：93歳。11月30日永眠。

平成28年（2016）：2月発行の『日本民俗学』285号に常光 徹による「追悼 水木しげる氏」掲載〔常光 2016：163〕。日本民俗学会年会（10月1日：千葉商科大学）にて1分間の黙祷。

水木の日本民俗学会入会は、昭和48年（1973）、51歳のときであった。この年には、『総員玉砕せよ！！：聖ジョージ岬・哀歌』が刊行されているが、後に水木は、「自作の劇画や漫画の中で、最も愛着深い作品は何かと聞かれれば、『総員玉砕せよ！』と答える」〔2004a：102〕と語っている。亡くなった戦友たちへの哀歌でもある大作の刊行により、水木は肩の荷を降ろし、人生に一区切りをつけたのかも知れない。

『妖怪談義』とヌリカベ・イッタンモメン

翌1974年、小学館入門百科シリーズの32冊目として、水木著『妖怪なんでも入門』が刊行される。ここでは、水木の妖怪観が開示されるとともに、鳥山石燕と並んで柳田國男の名が登場する。同書第一章の冒頭「妖怪とはどんなものだろう!!」において、「妖怪の型を定着させたのは、いまから二百年前の鳥山石燕という画家だ」という評価に続き、次のように記している。

なんといっても、柳田國男の『妖怪談義』。これは、妖怪が生きている。しかし、残念なことに型はない。私は、昔の絵などを参考にしたり、創作したりして、『妖怪談義』のものを絵にした。『鬼太郎』のなかで妖怪を創作したのも三十ばかりあるが、妖怪は、ほんらい、怪獣なんかのように創作されるべきものではないと思う。妖怪は、昔の人が残した遺産だから、その型を尊重し、後生に伝えるのがよい [1974: 17]。

『妖怪談義』のものを絵にしたとあるが、その好例が、鬼太郎の盟友となるヌリカベとイッタンモメン、そしてコナキザデとスナカケババであろう [柳田 1956: 218, 221, 227]。『妖怪談義』は1956年に修道社より刊行され、その後、講談社学術文庫版が1977年、『柳田國男全集』6への収録が1989年であるので、水木が手にしたのは修道社版ということになる。『妖怪談義』所収の「妖怪名彙」は全国から79名称の妖怪を挙げているが、これは1938年から翌年にかけて『民間伝承』誌上に「妖怪名彙」の表記で6回にわたって連載されたものである。ヌリカベとイッタンモメンは、同年の第4巻第1号に隣りあわせて紹介されているので [柳田 1938: 12]、かれらの付き合いは80年に及ぶことになる。修道社版から2項目の全文を引用してみよう。

ヌリカベ 筑前遠賀郡の海岸でいふ。夜路をあるいて居ると急に行く先が壁になり、どこへも行けぬことがある。それを塗り壁といって怖れられて居る。棒をもって下を払うと消えるが、上の方を敲いてもどうもならぬといふ。壱岐島でヌリボウというのも似たものらしい。夜間路側の山から突出すといふ。出る場処も定まり色々の言ひ伝へがある (続方言集)。

イッタンモメン 一反木綿といふ名の怪物。さういふ形のもが現はれてひらひらとして夜間人を襲ふと、大隅高山地方ではいふ [柳田 1956: 227]。

「妖怪名彙」の前文において柳田は妖怪の分類法について2つの計画をもち、第一は出現の場所により「行路・家屋・山中・水上のおおよそ四つに分けられる」、「第二には信仰度の濃淡によるもの」と述べている [柳田 1989: 193]。しかし、「妖怪名彙」の配列を見ると、2つの分類法がほとんど活かされていないことに気づかされる。さらに、河童・ひだる神・船幽霊など、よりよく知られた妖怪たちの記載が無く、体系性と均衡、項目数の不足を指摘せざるをえない²⁾。

とはいえ、ヌリカベ・イッタンモメンの配列については、前にはサガリ (道の傍の古

い榎樹から、馬の首がぶら下る）、後にはノブスマ（土佐の幡多郡でいふ。前面に壁のやうに立ち塞がり、上下左右ともに果てが無い）が置かれている〔柳田 1956：227〕。いずれも「行路」の妖怪であり、かつノブスマとヌリカベの形態や性格は近似しているやうで、水木も後にこの二者の類似に言及している〔2014：557〕。

なお、水木の描くヌリカベは寡黙であるが、大隅（鹿児島県）出身のイッタンモメンはアニメにおいて九州方言を語っている。原典に対する水木の敬意の表れであろうか。

妖怪蒐集者・妖怪事典編集者としての水木

柳田の「妖怪名彙」が79名称の収録に留まるのに対し、①『妖怪なんでも入門』の索引には167の妖怪名が並んでいる。水木および水木プロダクションの妖怪蒐集にける熱意が感じられる。その後も、水木は、妖怪の挿絵付きの辞典類を編集し続けてきた。

②『水木しげるの妖怪事典』（1981年）と③『水木しげるの続・妖怪事典』（1984年）では都合200の妖怪が掲載される。大作『水木しげる 昭和史』（1988・1989年）の完成後、④『日本妖怪大全』（1991年）では425名称を収録。⑤『続・日本妖怪大全』（1994年）では288名称が追加される。さらに、④が改題・再編集され⑥文庫版『図説 日本妖怪大全』（1994年）が、同様に⑤が文庫版⑦『図説 日本妖怪大鑑』（2007年）として刊行される。そして水木の死の前年には、⑧『決定版 日本妖怪大全：妖怪・あの世・神様』（2014年）が刊行される。同書は、⑥と⑦を再編集、改題して合冊化したものであるが、その帯には、「この世に跋扈する魑魅魍魎764、あの世の光景19、神仏112！ファン垂涎の895項目、究極の妖怪バイブル」と記されている。④以降は、それぞれ、50音順の配列となり、利用者にとっては便利である。なお、上記、いずれの事典も一部例外を除いて出典が明記されていないのは極めて残念であり、かつ、後述するように、水木の大幅な潤色や創作が混在している可能性が否定できなくなる。

なお、日本民俗学における妖怪蒐集であるが、民俗学研究所編集により1955・1956年に刊行された『総合日本民俗語彙』に、「妖怪名彙」の再録を含め、多数の妖怪の名称が収められた。

井之口章次は、研究史を振り返るなかで、『総合日本民俗語彙』収録の妖怪関係のものとして、「妖怪」の項に416、「霊異」の項に142、あわせて558の名彙を数え、「霊異」の中に「妖怪と認められないものも含まれているから、まずまず500ほどの名彙が出ているとしておいてよい」と述べている〔井之口 1975：180〕³⁾。1950年代の民俗学の成果がほぼ500名称である。水木や水木プロダクションが、この数を超えたのは、民俗学の資料に加え、鳥山石燕らの妖怪画に取材しているからだと考えられる。

のんのんばあと水木

『のんのんばあとオレ』（小説版）は、「私が妖怪の絵やマンガをかくようになったのは、

子どものときに、近所に“のんのんばあ”というおばあさんがいたからです」という一文に始まっている〔1977：7〕。幼少期の水木は、武良家に出入りしていた「のんのんばあ」こと景山ふさ（生年不詳-1933）から、妖怪を初めとする民間伝承を聞かされており、その影響の大きかったことは本人が随所で回想する通りである。水木少年は、「学校から帰っても勉強なんかしない。もっばら、のんのんばあのところにはいりこみ、お化けの雰囲気ひたることをたのしみにしていた」〔同：74〕。婆⁹⁾は「しばしば正福寺という近くの寺へオレをつれ出した。のんのんばあが和尚さんと話をしているあいだ、オレはもっばら本堂にある地獄極楽の絵をながめてたのしんだ」という。そして、「民俗学に興味をもっていろんな村の生活をおもしろいとおもうようになったり、妖怪の世界を探索してみようとおもうようになったりしたのも、地獄極楽の絵から受けた衝撃によるのだろう」と回想している〔同：43〕。

のんのんばあはいかなる人物だったのだろう。まず、その呼び名であるが、水木によれば、「鳥取県あたりでは神仏に仕える人を『のんのんさん』と言っていたから」だという〔2004a：37〕。婆は「『拝み手』とよばれるじいさんとふたりいっしょに、オレの家から100メートルほどはなれた、小さな道の奥にある、四畳半二間の家に住んでいた。拝み手というのは拝んで病気をなおす人という意味で、病人を救う仏様である薬師如来の代理人ということである。のんのんばあは、その代理人に仕えているというわけだ。島根半島に一畑薬師という近在に有名な寺があり、拝み手のじいさんはそこから番茶の煮だしたようなものをビールびんに入れて持ち帰ってくる」。それが万病に効くとされていたという〔1977：14-16〕⁹⁾。

また、水木は父親から、婆に関して、「二十歳ごろから女中にきた話、炊事や子守りをした話、ぐうたらな男と駆け落ちした話、またもどってきた話、かわいそうにおもったオレのじいさんが、当時の120円で家を建ててやった話」を聞いているという〔同：187〕。

経済的に恵まれなかった婆は、最晩年、結核患者の看護を引き受け、自ら罹患し、水木兄弟の見舞いの後、他界する。1933年、水木、11歳のときであった。水木は「学校では教わらない、さまざまなことを教えてくれたこの名もないばあさんは、こうして死んだ。その死は、餓死したという感じのみじめな死だったようにおもえる」と記している〔同：187〕。

なお、小説版『のんのんばあとオレ』の「のんのんばあの死」には、水木の死生観とそれに関する用語法の特色が窺われる興味深い記述で結ばれているので、引用してみたい。

「転生」ということばがあるが、それは、亡くなった人の心が、ほかの人に宿り、生きつづけることだとすると、オレはいまでも、のんのんばあの心が、オレに宿り生きつづけているよう

な気がしてならない。妖怪といういつも、のんのんばあの雰囲気というかんで考えてしまう。そして、いまだに、たえず、「妖怪ってなんだろう」という疑問につきまとわれているのも、のんのんばあのせいなのかもしれない。[同：189]。

なお、1990年のちくま文庫版では、なぜか下線部が以下のように置き換わっている。

オレはまた次のオレの「転生者」に「妖怪ってなんだろう」と伝えるだろう。そうにして何百年もたったとき、きっと妖怪の正体もわかるようになってのことだろう [1990：184-185]。

68歳となった水木は、次世代の妖怪研究を案じるようになったのだろうか。それとも、自らの再生を願ったのだろうか。両版ともに水木は「転生」と表現しているが、婆の死は、水木誕生後であり、少なくとも「再生」や「再受肉」とは呼びがたい。さらに、水木は、13歳で初の個展を開いた際の回想として、同書において、もう一つの転生譚を記している。

おやじの話によると、オレのおじさんに絵のじょうずな人がいたという。おじさんは文展（略）で特選になったとかいう人で、パリまで出かけて行っただが、三十歳で肺炎になって死んでしまった。ちょうどそのときにオレが生まれ、おじさんの生まれ変わりみたいなので、高い油絵の道具を買ってくれたのだという [1977：211]。

こちらの方は、ちくま文庫版でも記載の変更はないが [1990：206-207]、おじの死の直後に水木が誕生しており、文字通り「転生」と表現できそうだが、水木は、この場面では「転生」とは記していない。

ところが、『ほんまにオレはアホやろか』（1978年）では「父の叔父に、三十歳の若さでパリで若死にした画家がいた。その友人に、鍋井克之という画家がおり」とある [1978：57]。なお、『日本経済新聞』の「私の履歴書」⑤（2003年8月5日）でも、「父の叔父でパリで三十歳で客死にした画家がいて、父はとても尊敬していた。その叔父と私の誕生日がたまたま同じで、父は『生まれ変わりだ』と信じていたようだ」とある。「私の履歴書」は2004年の『水木サンの幸福論』に再掲載され、一部加筆されるが [2004a：55]、前後の記載は変わらないので、やはり、水木のオジではなく大叔父のようである。さらに、水木の父が「生まれ変わり」と考えた根拠も、『のんのんばあとオレ』（1977年小説版）にある「ちょうどそのときにオレが生まれ」ではなく、誕生日の一致にあるようで、もしかすると、この大叔父の他界は水木誕生後であったかも知れない。「転生」の描き方は、「オジ」とのそれが、因果律の強調によりもっとも迫力を感じさせている。一方で、水木自身が「転生」という語を使用しているのは、婆との関係においてであることも注意しておきたい。

『のんのんばあとオレ』の民俗誌的価値

『のんのんばあとオレ』（小説版：1977年・1990年）は民俗学的にも興味深い記載に溢れている。「一 妖怪たちとくらした幼年時代」「二 たのしみが多すぎて勉強どころでなかった」「三 ガキ大将も楽じゃない」「四 自由な少年時代のあとで」の4章から成るが、そこには民俗誌としての価値があると考えられる。

妖怪に関する豊かな記述はもちろんだが、数々の遊戯、悪戯、ガキ大将・子どもの序列・隣町の子どもたちとの抗争や喧嘩、あだ名の命名法、羅宇屋（キセルなおし）や物売り、とんどさん・七夕・盆・セツタイ（接待）等の年中行事、葬儀、民間療法、間引、昆虫・魚介類・狐や猫に関するさまざまな民俗生物学的知識等々である。

水木は、子どもたちの生活を子どもの視線で見事に描いていると言える。そうした点で秀逸な「子どもの民俗誌」と位置付けることができるかも知れない。水木はまさしく学校嫌いであったが、水木が描いたのは、学校教育の対立軸ともいえる子どもたちのいきいきとした世界であった⁴⁾。

以上、筆者は小説版『のんのんばあとオレ』に深い興味を覚え、民俗誌的価値を指摘したが、同書には作家、あるいは漫画家としての文飾や潤色が施されていた可能性がある。なお、漫画版『のんのんばあとオレ』は小説版とは内容を大きく異にしており、明らかな脚色と創作部分が散見されるのだが、小説版にすでにその兆しが認められるようである。

続いて、のんのんばあが語ったという妖怪を対象に、作品ごとの描き方の相違と、情報の源について考えていきたい。

2. のんのんばあが語ったとされる妖怪

水木は随所でのんのんばあの思い出に触れ、また、彼女から聞いたという妖怪の名称を挙げている。作品により、その種類と記載に微妙な相違が認められ、水木の記憶に文飾や潤色が変わり、さらには後々の情報が追加されている可能性もある。ここで、刊行年順に、水木作品における、それらの妖怪名を列挙するが、初出時に番号を振りながら名称を数え上げていきたい。

1) 『のんのんばあとオレ』（小説版：1977年）：17名称。

- ①天井なめ [1977：16-18]、②海坊主 [18-19]、③子取り坊主 [19-20]、④キツネの嫁入り [同]、⑤河童 [26]、⑥サザエオニ [47-48]、⑦川赤子 [48]、⑧野寺坊^{の でらぼう} [50]、⑨白うねり [53]、⑩化けダヌキ・⑪大入道 [55]、⑫ネコまた [57]、⑬家なり^や [58]、⑭あかなめ [60]、⑮ぶるぶる [66]、⑯化けギツネ [124]、⑰べとべとさん [125-127]。

2) 『ねぼけ人生』（1982年）：6名称

同書「のんのんばあと妖怪たち」にて、⑮胴まわりがたらいほどもある大蛇・⑤河童・⑲小豆とぎ・③子取坊主・④狐の嫁入り・⑯人に憑いた狐 [1982：17-19]。

3) 『昭和史』第1巻（1988年）：4名称

同書「第三章 初めてさざえを食う」にて、⑥さざえ鬼 [1988：56]、①天井なめ [57-58]、④きつねの嫁入り [59]、「第12章 煙突男」にて、⑰べとべとさん [181-183]。

4) 漫画版『のんのんばあとオレ』⊖「わんぱく大戦争の巻」（1992年8月）・同⊖「妖怪に好かれた落第王の巻」（1992年10月）：16名称

小説版と漫画版では、内容と構成は異なり、全くの別作品である。幻想的なトーンで、多数の妖怪が描かれ、あかなめ・ぬりかべ・水虎などが水木（作品中では村木）たちの前に姿を現し、とくに小豆はかりは水木の友人的存在となっている。これらのうち、婆が水木に語ったと読み取れるものと、その他（無番の○を付す）を区別しながら登場順に列挙していこう。

⑳おとろし [1992a：19]、㉑ネコマタ [43]、㉒海坊主・㉒海座頭・㉒共潜^{ともかづき}・㉒蚊^{みづら}（ママ）⁷⁾・㉒あやかし [44]、⑰べとべとさん [45]、○イボの妖怪 [60]、⑭あかなめ [72,78]、㉒ぬるぬる坊主 [122]、○小豆はかり [136]、㉒ひだる神 [143-144,1992b：75]、㉒えんらえんら [1992b：41]、㉒うわん [1992b：43, 203-204]、○水虎 [115]、㉒ぬりかべ・①天井なめ・③人形の霊 [138-140]

以上、のんのんばあは、⊖では11名称、⊖では3名称、合計14名称の妖怪を水木少年に語っている。なお、⊖では、婆が、奉公先の娘で水木少年の友である美和に教えた妖怪として、㉒ぬりかべ・①天井なめ・③人形の霊 [1992b：138-140] の3名称が登場する。このうち、㉒ぬりかべについては、水木少年が描き、美和に貸した絵物語を見て、婆は「この妖怪はぬりかべだなあ」と語り出している。婆は、すでに水木少年にぬりかべを教えており、水木がそれを描いたと見るのが自然であろう。①天井なめ・③人形の霊も、設定上は、水木が間接的に聞いたということになろうが、婆が語った妖怪ということで番号を付すことにした。

一方で、○小豆はかりは、たびたび登場して水木と会話するのだが [1992a：136, 1992b：65-66, 121-123, 141-142]、婆が教えたという記載は本書にも、また、管見の限り、他の図書にもない。○イボの妖怪も登場するが、これは水木の夢の中に現われた一時的存在のようである [1992a：60]。さらに、水木と美和は、○水虎に遭遇し、その名をなぜか美和が知っており、水木に教えている [1992b：115]。したがって、これらに

つについては無番(○)とした。結局、漫画版全体で、婆が、水木と美和に教えた妖怪は合計16名称となる。小説版とほぼ同数であるが、⑳「おとろし」から㉑人形の霊まで、11名称の妖怪が初出していることに注目しておきたい。

5) 「私の履歴書」③「のんのんばあ」2003年8月4日『日本経済新聞』：2名称

『日本経済新聞』に連載された「私の履歴書」第3回「のんのんばあ」では、婆が「子供たちを集めてはお化けや妖怪や地獄の話をする」とあるが、具体的には、⑭あかなめ・⑰べとべとさんの2名称を挙げるのみである [2003c : 36]。

6) 「私の履歴書」(『水木サンの幸福論：妖怪漫画家の回想』第二部2004年3月)：7名称

「私の履歴書」は、大幅加筆されて、『水木サンの幸福論：妖怪漫画家の回想』(2004年3月)に掲載される。「2『のんのんばあ』の妖怪話」には、⑭あかなめ・⑨白うねり・⑰べとべとさん・㉑ぬりかべ・⑩見上げ入道・㉒水虎・⑲おとろし [2004a : 39] の7名称が記載されている。

5) の、あかなめ、べとべとさんに5名称が追加されたことになる。このうち、漫画版『のんのんばあとオレ』では、婆が美和に聞かせたものとして初登場していた「ぬりかべ」が、また美和から水木が聞いたという水虎が、ここでは、水木が婆から聞いたことになっている。さらに、⑩見上げ入道の初登場も注目されよう。

7) 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふう生きてきた』(2004年12月)：3名称

同書は、帯に「原画100枚オール描き下ろし絵自伝」とあるが、1頁ごとに見出しとカラーの挿絵を添えた水木の自伝的作品である。ここには、⑥サザエ鬼 [2004c : 18]、⑰べとべとさん [26]、⑤河童 [34] の3名称のみが挙がり、初出のものはない。

以上、7作品を総合すると、のんのんばあが語った妖怪は、次の32名称となる。

①天井なめ、②海坊主、③子取り坊主、④キツネの嫁入り、⑤河童、⑥サザエオニ、⑦川赤子、⑧野寺坊、⑨白うねり、⑩化けダヌキ・⑪大入道、⑫ネコまた、⑬家なり、⑭あかなめ、⑮ぶるぶる、⑯化けギツネ、⑰べとべとさん、⑱「胴まわりがたらいほどもある大蛇、⑲小豆とぎ、⑳おとろし、㉑海座頭・㉒共潜、㉓蚊、㉔あやかし、㉕ぬるぬる坊主、㉖ひだる神、㉗えんらえんら、㉘うわん、㉙ぬりかべ、㉚人形の霊、㉛見上げ入道、㉜水虎

作品ごとに、挙げられる妖怪の数や名称が大きく異なり、最後の水虎などは、1992年の漫画版『のんのんばあとオレ』では、美和が水木にその名を教えており、2004年

の加筆版「私の履歴書」では、水木が婆から聞いたことに転じている。このような、知識の出所に関する不一致あるいは錯綜からも、実は、以上の妖怪の多くが、婆から得られたものではなく、反対に水木が婆に語らせたという可能性が浮上してくる。

それでは、水木は、これらの妖怪の名称をどこから得たのであろうか。水木自身、『妖怪談義』のものを絵にした」と述べていたが〔1974：17〕、ここで、32名称を「妖怪名集」を含む『妖怪談義』全体の記載に照らしてみると、32名称中、少なくとも11名称の対応が、次のように確認される。

①海坊主：海坊主〔柳田 1956：34〕、④キツネの嫁入り：狐の嫁入〔同：233〕⁸⁾、⑤河童：河童〔同：38〕・川童〔同：76-92〕、⑦べとべとさん：べとべトサン〔同：223〕、⑨小豆とぎ：アヅキトギ〔同：113・217〕、⑫蚊：ミヅチ（蚊）〔同：106〕、⑬ひだる神：ひだる神〔同：123-126〕、⑭うわん：ワワン・ワン〔同：53〕⁹⁾、⑮ぬりかべ：ヌリカベ〔同：227〕、⑯見上げ入道：ミアゲニフドウ〔229〕、⑰水虎：水虎〔同：88〕。

鬼太郎の盟友、ヌリカベ・イッタンモメン・コナキザデ・スナカケババが『妖怪談義』に依拠することは先述した通りだが、「のんのんばあ」の口述」として紹介される妖怪たちの三分の一が同書を出典としている可能性がある。

ところで、水木は、『妖怪なんでも入門』の冒頭で、柳田の『妖怪談義』の影響を述べるに先立ち、鳥山石燕（1712-1788）が日本の「妖怪の型を定着させた」と記していた〔1974：17〕。水木は、柳田同様に石燕に取材していたようである。

筆者の専門外であるが、ここで水木の石燕からの取材について考えておきたい。石燕の『画図百鬼夜行』『今昔画図続百鬼』『今昔百鬼拾遺』『百器徒然袋』を収めた『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』が2005年に刊行され、幸にも索引が用意されている〔鳥山 2005〕。先の32名称をそれに照らすと、下記のような16名称に対応が確認された。

①天井なめ：天井嘗、⑤河童：河童、⑥サザエオニ：栄螺鬼、⑦川赤子：川赤子、⑧野寺坊：野寺坊、⑨白うねり：白容斎^{しろうねり}、⑫ネコまた：猫また、⑬家なり：鳴家^{やなり}、⑭あかなめ：垢嘗、⑮ぶるぶる：震々^{ふるふる}、⑯おとし：おとし、⑰海座頭：海座頭、⑱あやかし：あやかし、⑲えんらえんら：煙々羅^{えんえんら}、⑳うわん：うわん、㉑水虎：水虎^{すいこ}

なんと、32名称の半数に当たる16名称に、石燕による同名の先行作品が存在していたのである。このうち『妖怪談義』に記載があるのは、⑤河童、⑳うわん、㉑水虎の3名称に過ぎない。そして計算上、のんのんばあが実際に語ったと考えられる妖怪数は、 $32 - 16 - 11 + 3 = 8$ に留まりうることになる。

ここに、江戸の絵師という特殊な職能者の創作を含む知識と、農村を中心とする庶民の民間知識との間に知識量の大きな相違を認めることができる。水木は、のんのんばあの人生に「戦前の裏日本の片すみで生活した人びとの平均的なすがたが描けるような気

もする」と述べている [1977:187]。ならば、彼女が実際に有していた知識はほぼ間違いなく後者、庶民の民間知識のはずであった。

水木は、石燕の妖怪画と民俗学的資料を接合し、のんのんばあの口を借り、彼女自身の知識にそれらを上乗せしてきたものと考えられる。

同じことは、水木自身が体験したという、ひだる神、べとべとさん、ぬりかべについても指摘できるかも知れない。以下、水木の諸作品におけるこれら3妖怪の描き方に注目していきたい。

3. 水木の「ひだる神」体験とその描き方

「ひだる神」は、民俗学ではよく知られた伝承で、『民俗学辞典』(1951)『民俗の事典』(1972)『日本民俗事典』(1972)『日本民俗大辞典』(2000)に共通して立項されている。『日本民俗大辞典』では「山の峠道や四辻などで人にとりつき空腹にさせるという神霊」と定義され、地方名としてダルツク・ダリ・タリ・ガキ・ヒダルボウ・フダルガミ・ダレ・ジキトリ・ダラシを挙げている [梅野 2000:426]。柳田國男は、1925年『民族』1巻1号に「ひだる神のこと」を寄稿している。各地の事例と地方名を整理しながら「便宜のために分り易いヒダル神の名を用い」、読者に類例の報告を求めている [柳田 1956:123-126]。その後、ヒダル神の名を指標に、全国の研究者が報告を行なったが、大藤時彦は、1943年、『民間伝承』誌上掲載の「ヒダル神」において、それらの研究を列挙・整理している [大藤 1943:17-20]。こうした背景のもと、数ある地方名から、ヒダル神の名が標準化され、1951年の『民俗学辞典』を皮切りに「ひだる神」の名が定着する。なお、1956年には、柳田の「ひだる神のこと」が『妖怪談義』に収録され、水木の目に触れることになる。

水木は、幼少期に自分自身がいわゆる「ひだる神」に相当する体験をしているという。その場面は、いくつかの作品に繰り返し取り上げられている。

1) 『のんのんばあとオレ』(小説版:1977年)

小説版『のんのんばあとオレ』によれば、昭和10年(1935年)、小学校高等科に進んだ13歳の水木は、教頭の薦めで個展を開くことになり、その前に米子で開催された油絵展を見学する。徒歩で往復30キロであったが、帰路、日が暮れる。道端の家からは夕食を準備する音が聞こえ、水木少年を空腹が襲う。水木は次のように記している¹⁰⁾。

歩くのが急に大儀になってきた。とおもううちにひや汗が出て、胸がドキドキしだした。どこかで横になろうと道をわきにそれ、あぜ道に稲がほしてあるところで寝ころんだ。しかし、苦痛はとまらない。横にある稲の穂を口にいれて、モミガラをとって食った。(略)そうしているうちにだんだん元気が出てきて歩けるようになったが、一時はどうなることかとおもった。これは空腹も空腹だったが、もともと体力はあったし、ほかに原因があ

るような気がした。おとなになって、柳田国男の『妖怪談義』を読むと、「ひだる神のこと」という一文があって、おなじようなことが書いてある。旅の途中で死んだ人の悪霊が、ダルというものになって、これが道行く人にとりつくのだという。そういうときには霊をなぐさめる意味で食物を一口食べばいい。むかしの人はそのためにフトコロに干飯（ほしいい）を持って歩いたそうだ。こういうことはあとで知ったわけだが、まったくそのとおりで、ああいう奇妙な苦痛を、むかしの人が妖怪のせいだと考えたことはむりもない [1977：214-215]。

2) 『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』(2001年)

水木のこの体験については、2001年刊行の『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』第1巻に漫画として描かれている¹¹⁾。

金一文もないから三十キロの道があるいていった……かえり ものすごい空腹にみまわれた／おかしいな？／急にえらくなった／こんなバカなことってあるかな／くらくら／パツタリ／はあ はあ はあ／すなわち俗に「ひだる神」がつくという現象にあったのである／とにかく意味もなく苦しい／一時は死ぬかと思ったが／ちょうど稲の穂が干してあったのでこれを食べた／三十分もするとウソみたいに元気になり家にかえった／どうしてそういうことがおこったのだろう……／それは長い間謎だった／後年柳田国男の本で「ひだる神」という妖怪だったと知って、大いにおどろいた／すなわち餓死したものの霊がとりついて一時的に苦しめるといわれるが、本当におそろしい [2001：196-199]。

この漫画における「ひだる神」体験の描写は、1) の記述をほぼ精確に漫画化しているといつてよい。そして、この漫画は、2) の再編集版である『完全版 水木しげる伝』(上) 戦前篇にもそのまま再掲載されている [2004b：196-199]。

3) 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふう生きてきた』(2004年)

同書は、1頁ごとに見出しとカラーの挿絵を添えた水木の「絵自伝」である。「のんのんばあとの別れ」に続く「散歩」と「ひだる神」の2頁にわたって、「ひだる神」体験が描かれる。

その頃ぼくは、日曜日になると散歩を楽しんでいた。(略) のんのんばあの教育のおかげで、ぼくは野にも山にも妖怪がいると思っていた。川にも河童がいることを知っていたから、いつか会えるという期待もあった。だから散歩が好きだったのである。ところがある日、いつもよりだいぶ遠くまで出かけ、さて帰ろうと思ったら、急に足が動かなくなってしまった。「あつ、どうしたんだ……おかしいぞ……」と思うが、足がもう一歩も前に進まないのだった。こんなバカなことってあるだろうか／じつはこれが「ひだる神に憑かれる」という世にも恐ろしい現象だったのである。もちろんこのときのぼくにはそんなことはわからない。とにかく意味もなく苦しいのだ。腕を伸ばすと、稲の穂があったので、ぼくはとっさにこれを取って口の中に入れた。すると三十分位たってからだろうか。突然うのように元気になった。このことは長い間ずっと謎だったが、大人になって柳田国男の本を読んだとき「これだ！」と思った。山道などを歩いていて、突然歩けなくなったとき、それは餓死した人の霊がとり憑いて一時的に苦しめるといふのだ。これが“ひだる神”、という妖怪である。もしこんな目にあったら、米一粒で

もあるいはてのひらに米という字を書いてなめるだけでもよいという [2004c: 34-35]。

ここでの「ひだる神」体験は、米子からの帰路とは特定されず、ある日の散歩の帰りと記されており、また「米一粒でもあるいはてのひらに米という字を書いてなめる」という対処法を伝聞形で紹介している。これは柳田による「何か僅かな食物を口に入れる」(奈良県十津川等)、そして「米といふ字を手掌に書いて嘗めるまじなひ」(和歌山県日高郡・長崎県日南高来郡)という記載 [柳田 1956: 123-126] の紹介であり、「僅かな食物」を具体的に「米一粒でも」と表現したのは、作品中の水木の行動に重ねているのであろう。

以上、3作品における「ひだる神」体験は、柳田の『妖怪談義』によって、初めてそれと理解したとされ、後二者においては、その時の驚きの様子が語られている。ところが、『のんのんばあとオレ』漫画版では、その記述がまったく異なっている。

4) 漫画版『のんのんばあとオレ』② (1992年)

小説版では、第三章「ガキ大将も楽じゃない」の「はじめての個展を開く」の項で「ひだる神」体験が語られていたが、漫画版では「ひだる神」が独立した項を成している。当該部分を文章化してみよう。

一人絵を描く水木(村木)少年に、旭日旗をもって軍隊を真似て行進する子どもたちが遭遇し、がき大将は、水木に「相手なし!」すなわち仲間外れを宣告する。しょんぼりと一人、畑や林を歩く水木は「あー腹へった……」さらに「あー疲れた」とささやく。そこで「天に代りて不義を討つ／忠勇無双のわが兵は…」と軍歌『日本陸軍』を歌い出すが、「やめた。余計腹がへるわ」とつぶやく。火の玉と思われる尾を引いた白塗りの物体が「スーッ」と宙を舞う。「ん!?なんだ!?／ん、なんかおるんか!?／うわーっ」と駆け出すが「あっ!」と叫んで「ドタッ」と倒れる。「う、動けん!」と叫ぶ水木の周りを9つの火の玉が取り囲む。次のコマでは、9人の幽霊が現れ、長と思われる10人目が水木の前に跪く。水木は目を見開き、「ひ、ひだる神だ!／そういえば、のんのんばあが言っちゃった」と回想シーンが始まり、婆はこう語る:「ひだる神はなあ…／飢え死にした旅人の怨霊で取り憑かれたもんは金縛りにあって死んでしまうこともあるんだが」。「助からんのか」という水木の問いに「金縛りを解くには何か一口食べるか／何もないときは手のひらに米という字を書いて三度なめたらええ」。回想が終わり、再び、幽霊に囲まれた水木が「た、助けてくれえ!」と叫ぶと、一人の女兒が現われる。「痛いの?」「う、動けん、な、何か食うもん持っちゃらんか」。少女が手にするものを見て「そ、それはなんだ?」「これは漬け物」「く、食わしてくれ」「だめ、おじさんに叱られるから」「ほ、ほんなら、こ、米という字を書いてくれ」「わたし字が書けないの」「ひ、ひらがなでええ」「ひらがなも知らない」「はほんなら十文字書いて……」「こう?」「そげだ……そしてペケを……」「ペケ?」「バツだ!」「こう?」「そ、そげだ」と言って「ペロペロペロ」と掌を嘗めると、長い尾を引いた火の玉が「スー」と去っていく。「ああ、助かった」「大丈夫?」「ありがとうな」「よかった」。引っ越してきたばかりの吉川美和といういわくありげな7歳の少女との出会いであった。美和は、松江の遊郭で母

親を失くし、猪熊鷹虎に引き取られ、「たたりものけの家」に引っ越してきたが、後に神戸の芸者置屋に売られていく [1992b : 70-78, 194]。

『妖怪談義』の記載から得た書承の知識を、なんと、のんのんばあからの口承としていのである。なお、漫画版では、この場面に先立つ「ドーナツ」の項で、すでに「ひだる神」が語られている。水木（村木）3兄弟が5里離れた米子までドーナツを買いに徒歩で出かけるが、途中で「もう帰る／二人で行ってくれ」と言い出す弟に、水木は「そんなら、ひだる神に気をつけてな」と語り、「腹がへったり疲れたりした旅人にとり憑く妖怪じゃ／のんのんばあの話だと飢え死にした人の霊だそうだと弟を恐がらせている [1992a : 143-144]。

対処法についても、水木は、「何か一口食べるか／何もないときは手のひらに米という字を書いて三度なめたらええ」と婆に語らせている。「三度」というのは『妖怪談義』の記載には無いが、呪術の定番である。水木の豊かな知識の一端が接合されたものといえよう。

なお、3)『水木しげるののんのん人生』では、「のんのんばあとの別れ」の後の体験となっており、婆から説明を受けることはもはや不可能であろう。同書には「大人になって柳田国男の本を読んだとき『これだ!』と思った」とあり、同書内では矛盾はしないが、作品間では矛盾が露呈する。

水木は、日本民俗学会の会員でもある。この辺で研究倫理上の問題も気になってくる。ただし、4)『のんのんばあとオレ』漫画版では、この場面の前にも、「小豆はかり」がたびたび登場して水木と会話したり、階段からころげ落ちた水木を「ぬりかべ」が助けたり [1992a : 135-138, 1992b : 13-15, 121-123]、荒唐無稽といえる場面が連続している。それゆえ、大方の読者は、この作品の創作性に気づかされるはずであり、同書に研究倫理は無縁といえそうである。

4. 水木の「べとべとさん」体験とその描き方

ベトベトサンは、「妖怪名彙」（『妖怪談義』所収）に収録されるが、ひだる神とは異なり、民俗学の事典類には記載がない。研究者間での知名度の非常に低い妖怪といえる。しかし、水木は小学生の時に同じく境港で「べとべとさん」に遭遇したという。何作品かに記述や描写があるので、それらを比較してみたい。

1) 小説版『のんのんばあとオレ』（1977年）

同書では、小学校3年生のとき、島根半島で出会った一人の「じいさん」を水木が「化けギツネ」と勘違いした思い出が語られる。続いて、「狐狸（ギツネとタヌキ）の類の話といえば、こんなこともあった」との前置きで、「べとべとさん」との遭遇体験が記

述されている。

月の美しい夜、兄貴とふたりでお使いに行った。オレも兄貴も「ぶくり」という高下駄をはいていたのだが、さえわたった空気のせいかコツコツと音がよくひびく。ふたりともそれがおもしろく、カラン、コロン、カラン、コロンと、わざと音を立てて歩いた。すると、もう一組おなじ音が聞こえるではないか。ふたりはハッとして音を小さくしたが、もう一組の音はいぜんとして月夜に高く鳴りわたっている [1977 : 125-126]。

驚いて、冷や汗を流しながら帰宅した二人は、のんのんばあに、「キツネが出た」と報告する。すると、「のんのんばあはすこしもさわがず、『そりゃ、べとべとさんだ』という。『化け物の一種で、おらのあとにもしょっちゅうくつついて歩く』(略)『べとべとさん、先へお越し、というたら、どこぞに行ってしまう』」 [1977 : 126]。

2) 『ゆうれい電車』(1980年)

「水木しげるのおばけ学校シリーズ」全12巻の2巻目として1980年、『ゆうれい電車』が刊行される。その「あとがき——あばけとの出会い」で、水木は「ぼくの場合、おばけと出会っていないながら、その時はそれと気づいたことはない。人に教えられるか、本を読んで、なるほど、あれがおばけだったのかといった場合が多い」と記している。重要な告白といえよう。続いて、「べとべとさん」と「ぬりかべ」との遭遇体験が紹介される。

ある月夜だった。ぼくが下駄をはいて、カランコロンとあるいていると、もうひとつ別な音が、カランコロンと、うしろで聞こえる。おかしいなア、と思ったが、こわくてうしろをふりむくことができない。人は一人も通っていないし、ぼくは恐怖のあまり固くなって、冷汗をかきながら、家にかえって、おばあさんにきくと、「あ、それはべとべとさんというおばけがついたんだよ。べとべとさんにつけられたら、べとべとさん、先へおこし、といって、道のわきによれば、下駄の音だけが先へゆくから、べとべとさんにつけられなくなるのだよ」といわれて、なるほどと思ったことがあった [1980 : 110-111]。

ここでは、兄とでなく一人で歩いていたときのように読み取れるが、次は再び兄弟での体験である。

3) 『水木しげる 昭和史』第1巻(1988年)

水木兄弟のべとべとさん体験は、『昭和史』の意外な場面で漫画化されている。関東大震災から満州事変を描く第1巻の第12章のタイトルは「煙突男」である。世界大恐慌下の1930年、多くの市民が職を失い、労働争議が相次ぐなかでの川崎での事件である。この年、水木は8歳の小学校2年生。べとべとさんはその枕として登場するが、それを文章化してみよう。

水木兄弟が下駄を鳴らして川沿いの夜道を歩いていると背後から「カランコロン、カランコロン」と音がする。「うしろになんとかついてくるぞ」と兄。「見んでもわかつちよー」と水木。「うわーっ」と走り出してハァハァの体で帰宅する。出迎えたのんのんばあ「どげしただ」。兄「そ、そこに」。水木「うしろに化物が」。婆「うしろみたか」。水木「きよとて（こわくて）みられん」。婆「ははは、そや、べとべとさんじゃ／下駄の音がするだろ」。水木「うん」。婆「その音がしたら横へよけて／べとべとさん、先へおこし、というんだ」。水木「？」。婆「おらが大阪におったときについてきたことがあっただ」。兄「ふーん」。水木「べとべとさん／幽霊とちがうか」。婆「わからん／近ごろは毎日のように浜辺に自殺者が上がつちよる」。兄弟「ふーん」。婆「そのせいかな？」。ここで、ナレーター役のねずみ男が現われ「そのころ町では一家心中、強盗、ルンペン、欠食児童の話が珍しくなかった／そして労働争議の数も目立って多くなった」。こうして、富士紡川崎工場に煙突男が登場するのである [1988：179-185]。

水木と兄は二作品において不思議な体験を共有し、直後、婆から「べとべとさん」の名称とともに、対処法を含んだ説明を受けている。ところが、漫画版『のんのんばあとオレ』では、遭遇の場面が全く異なっている。

4) 漫画版『のんのんばあとオレ』（1992年）

小学校4年の水木（村木）少年には変わった収集癖があり、猫や犬の骨を押入れに入っていたのが見つかり、婆と二人で、砂浜に出かけて埋葬する。その帰路、「カラン、コロン、カラン、コロン」という音に気づいた水木少年は、

「の、のんのんばあ、う、後になにかいる」。婆は「ああ、べとべとさんがついてきたようじゃ／下駄の音がするけんね」と説明する。「に、逃げよう！」という水木に「逃げんでもええ、道をあけて『べとべとさん先へお越し』と言ええ／ほらこっちへ寄って」と水木を路傍に寄せ、二人は「べとべとさん先へお越し」と唱える。すると、下駄を履いた大きな口の球形の妖怪は、二人の先を越していく。「行ったようじゃのう／もう下駄の音は聞こえんじやろ」「うん、見えたか？」「姿は透き通ってよう見えん」「幽霊か？」「ようわからん、猫か犬の魂か……／それともこの間、浜にあがった自殺した人の霊かな……」。腰を抜かした水木は「もう絶対骨は拾ってこん!!」と誓うのである [1992a：43-48]。

前三作品とはまったく異なり、婆との同時体験であり、説明も現場で受けている。正体をめぐっては、小説版では「化け物の一種」とのみ説明されるが、『昭和史』では、不況下での自殺や心中の多発という背景のもと、婆は、浜辺に上がる自殺者の幽霊を結びつけていた。そして漫画版では、「猫か犬の魂か」と語り、水木に異様な収集癖を反省させている。名称・現象・対処法は同じであっても、その正体に関する説明は、場面に応じて見事に変化しているものといえよう。

5) 「私の履歴書」③「のんのんばあ」『日本経済新聞』2003年8月4日

『日本経済新聞』連載の「私の履歴書」では、婆が語り、水木が夢中になった妖怪話

の一つとして次のようにある。

誰もいないはずの夜道で後ろの方で足音がする。「べとべとさん」だ。振り向かずに「先へお越し」と言う通り過ぎていく [2003c : 36]。

「私の履歴書」は大幅加筆されて、『水木サンの幸福論：妖怪漫画家の回想』（2004年3月）に掲載されるが、「べとべとさん」の記載については加筆はなく [2004a : 39]、ともに、遭遇体験については言及されていない。

6) 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふう生きてきた』（2004年12月）

ある夜のこと、ぼくは兄貴とゲタをカランコロンの鳴らしながら歩いていた。すると、ぼくたちのゲタの音以外に、うしろからもべたべたと別の足音が聞こえる。「う、うしろから、なんだかついてくるぞ」兄貴が怖そうに言った。「見んでも、わかっちゃー」。こんな足音は化物に決まっている。ぼくたちは「うわーっ」と叫びながらかけ出した。化物に何をされるかわからない。ハアハア言いながら家に帰って今のことをのんのんばあに言うと、「ああ、それは「べとべとさん、だ」と言う。「うしろから足音が聞こえたら、横へよけて『べとべとさん、先へお越し』と言うんだ。そうしたら、べとべとさんはいなくなるよ」ということだった [2004c : 26]。

以上、6作品に共通するのは、「べとべとさん」に関する知識を水木に与えたのが、のんのんばあだという点である。しかし、これは事実であろうか？ 柳田の『妖怪談義』には「ベトベトサン」が収録されている。『民俗学』二巻五号（1930年）掲載の伊達市太郎による「大和宇陀郡地方俗信」からの引用に基づく内容であるが、「大和の宇陀郡で、独り道を行くとき、ふと後から誰かがつけて来るやうな足音を覚えることがある。その時は道の片脇へ寄って、『ベトベトさん、さきへおこし』といふと、足音がしなくなるといふ」とある [柳田 1956 : 223]。

「ベトベトさん、さきへおこし」という呪文は、水木が4作品で繰り返し記してきたそれと完全に一致している。「片脇に寄って」というのも『昭和史』と漫画版『のんのんばあとオレ』の2作品に描写されている。水木は、ひだる神と同様に、『妖怪談義』に取材して、その記載内容を婆に語らせたのであろう。ただし、『妖怪談義』には単に「足音」とある。宇陀の山道であるので、旅人は草鞋を履いていたはずである。「ベトベトサン」とはその足音に基づく命名であろう。

水木作品中の足音に注意してみると、5) のみは単に「後ろの方で足音」とあるが、1) 2) 3) 4) では「カランコロンの音」であり、3) 4) ではそれを「下駄の音」とする、のんのんばあの説明が付される。

「下駄の音」というのは1930年当時の境港という地方都市に相応しい潤色であり、かつ「ゲゲゲの鬼太郎」のテーマソング「カランコロンの歌」はあまりに有名である。

唯一2004年12月の6) では、「べたべたと別の足音が聞こえる」と記しているが、こ

れは、原典回帰ともいえそうである。

7) 『決定版 日本妖怪大全』(2014年)

水木が「べとべとさん」について最後に記載したのは、『決定版 日本妖怪大全』におけるそれであろう。「子供のとき、夜道を歩いていると、よく誰かがあとについてくるような気のすることがあったものである」という一文で始まるが、これまでに見た水木自身の具体的体験が稀釈されているかのようである。続いて、「ある人が提灯を下げて歩いていると、ビタビタと足音がする」というのも「ベトベトサン」の語源を尊重した原典回帰をより深めたかのようである。しかし、驚くべき記載がこれに続く。

そこで、「べとべとさん、先へおこし」というと、「先に行くと、暗くて歩けない」という。「それなら、提灯を貸してやる」というと、べとべとさんは、提灯を借りて先に行った。提灯は翌朝ちゃんと返されていたということである。この妖怪は奈良県によく現われたというが、似たようなものは全国的にいるように思われる [2014: 654]。

ここでは「先へおこし」の後にも問答と対処法が続いている。出典が示されていないのは返すがえすも残念であるが、それゆえに創作という可能性が浮上してくる。なお、「奈良県」というのは『妖怪談義』の記載のことであろう。『妖怪談義』のベトベトサンの前後には、オクリズメ・オクリヌ・ムカヘヌ・オクリタチ・スネコスリ（犬の形）・アシマガリ（狸のしわざ）などが列挙され、いずれも正体たる動物が明示されるが、ベトベトサンさんに限っては、その正体についての言及がない [柳田 1956: 222-224]。正体不明であるがゆえに、ベトベトサンには想像そして創造の余地が十分にあり、狐狸の類の話、自殺者の幽霊、猫か犬の魂、はたまた提灯なしには歩けない気の弱い妖怪と、多様な描き方が許されたのであろう。

先の「ひだる神」の場合も3作品においては、『妖怪談義』に取材していることを明記していたが、後の『のんのんばあとオレ』漫画版では、婆の口述ということに改変したという先例がある。「べとべとさん」も同様に、『妖怪談義』に取材し、その内容を婆に語らせた可能性が大きいものと考えられる。

水木の評伝の著者足立倫行も、水木が『妖怪談義』に取材したであろうことを推測しているようである。1948年境港市生まれの足立は、方言差に敏感であり、このことから同郷の水木本人に水を向ける。

足立「のんのんばあの妖怪の知識は、やはり若い頃に関西で得たものでしょうかね? / “べとべとさん、先へお越し、”の“お越し、”は関西弁ですね。松江や境港なら“先に行ってごしな、”とか“先に行って、ごっさんせ、”になると思うんですけど。柳田國男の『妖怪談義』でも奈良県に現われた妖怪ということになってますし……」

水木「関西でも女中をしていたということですから、関西で仕入れたんでしょう。必ずしも山

陰だけのものとは限らないです」

足立「年をとって境港に戻ってきてから水木さんに各地で仕入れた妖怪の名前を教えた？」

水木「そういうことになりますかね。確かに、何でもないただの婆さんでしたよ。でも私にとっては大きな存在だったわけです」[足立 1994：329]。

べとべとさんとそれへの対処法は、のんのんばあが関西で仕入れ、境港で水木らに教示したという理解である。3)『昭和史』(1988年)において、婆は「おらが大阪におったときについてきたことがあった」と語っているが、この点、水木の足立への説明に符合するとともに、『妖怪談義』の収録地奈良県へと距離を縮めている。

しかし、作品間を縦断的に見ると、さらに、いくつかの矛盾が生じることになる。例えば、2)『ゆうれい電車』「あとがき」における「ぼくの場合、おばけと出会っていないが、その時はそれと気づいたことはない」との述懐は、3)の「うしろに化物が」や4)の即時解説とは明らかに矛盾することになる。「あとがき」は作品本文や漫画本体に比して、客観性が求められ、創作の介入は少ないものと考えられる。ならば、やはり、後に文献で知ったというのが事実だったということになろう。

5. 水木の「ぬりかべ」体験とその描き方

ヌリカベとイッタンモメンが、柳田の「妖怪名彙」に掲載され[柳田 1956：227]、水木がそこに取材したことは、『妖怪なんでも入門』(1974年)の記述からも明らかである。

1)『妖怪なんでも入門』(1974年)

水木は同書第5章「百鬼夜行」の「里にすむ妖怪」の一つとして「ぬりかべ」を取り上げている。

ぬりかべは、九州の福岡地方の海岸によくあらわれる。夜道を歩いていると、とつぜん、目の前に白いかべがヌーッと立ちはだかり、行手をさえぎる。そこでびっくりしないで、おちついて地面の上を見まわし、ひろった棒で地面のあたりをはらうと消える[1974：130]。

先に引用した「妖怪名彙」の記載と比較すると、いくつかの文飾が認められるが、色彩を「白い」と特定したことに注意しなくてはならない。なぜ「白」なのだろうか？白壁や白漆喰のイメージを投影させたのか、もしかすると、作画に際して白塗りで描くことにより、インクと労力、時間を大幅に節約できるからであろうか。鬼太郎作品では、一反もめんが先行して登場しているようだが、彼もまた白塗りで描かれている。

さて、水木は、自身が戦地ニューギニアで「ぬりかべ」あるいはそれに類したものに会ったと繰り返して語っている。

2) 『娘に語るお父さんの戦記』（1975年）

筆者の知る限り、水木が「ぬりかべ」の名を挙げて同体験を初めて記したのは1980年であるが、同じ体験に関する記載は1975年の『娘に語るお父さんの戦記』に認められる。一人、敗走する水木が、「人間が槍をもって立っているように見える木」に脅えたシーンに続き、

名の通りジャングルになってしまって、木のつたやらなにやらわからぬもののため、まるで巨大な網にかかったように、右に行っても左に行っても、動きがとれなくなった。これではいかんと、無理に前の方へ行くと、つたやらなにやらがよけいにかからんで退くことも進むこともできなくなり、まるでジャングルにはりつけになってしまった格好になった。そんなところへマラリヤ蚊の大群である [1975：75]。

ここでは「ぬりかべ」は言及されず、丁寧な描写に続き、「巨大な網」を用いた直喩となっている。

3) 『ゆうれい電車』（1980年）

本書の「あとがき——あばけとの出会い」には、先の「べとべとさん」体験に続いて次のように記される。

戦争中、夜、敵におそわれてジャングルを逃げていたら、ぬりかべに出会った。形はハッキリわからなかったが、前へ押しても、コールドールのかわきかけのようなものが立ちほだかり、前へ進めないのだ。しかたなく休んで、ひといき入れて、前へ押してみると、今まで進めなかったのがうそのように前へ進めた。不思議なこともあるもんだなア、と思って、日本へかえって柳田国男の『妖怪談義』という本をみたら、それはぬりかべというものであると書いてあり、はじめて、それがぬりかべだとわかった [1980：111]。

ここでは、「ぬりかべに出会った」と明記され、それを、先の「ひだる神」体験と同様に、後の読書によって初めて知ったという体裁になっている。

4) 『水木しげる 昭和史』第5巻（1989年）

水木のぬりかべ体験は、『水木しげる 昭和史』第5巻第3章「ぬり壁にあう」にて漫画化されている。暗闇のジャングルで「ブタ公」との遭遇に肝を冷やした場面につき、

ジャングルをまえへまえへと進んでいるとどうしたわけか一歩も進めなくなってしまった／ぼくはあまりの意外さに、暗（やみ）の中に手をあてて押してみた。それは、コールドールが少し溶けかけたかんじで、押してみると、指が入った。あまりの不思議さに右や左もさわってみた。しかし、それこそ目のまえに“ぬり壁”ができたように進めないのだ。あまりのバカバカしさに、ぼくはその場にすわりこんだ／なんだバカバカしい。つかれた。寝よう／しかし、

おかしいな／もう一度さわってみよう／おかしいな、なにもいない／オレ狐に化かされたんかなア……。つかれた寝よう／うわーっ、ジャングルのヤブ蚊だ！／うわーっ／（眠りに落ち、目を覚ます）なんだもう昼じゃないか／よく寝たもんだなあー／なんだ、もうちょっと進んだら断崖じゃないか／“ぬり壁”に出会わなかったら死んでるところだ／足が鉛のように重く／のどがかわく」[1989：48-51]。

ここでは「“ぬり壁”ができたように」とあるが、ここでの“ぬり壁”は妖怪ではなく構造物としての壁であろうことに留意すべきであろう。挿絵に描かれた「壁」にも目や手足は認められない。

5) 『水木しげるのラバウル戦記』 1994年 筑摩書房

本書でも、「ぬりかべ」との表記はないが、挿絵には、おなじみの水木作「ぬりかべ」の姿を髣髴とさせるような姿が描かれ、水木が両手で押した部分が少々へこみ、やややわらかい様子である。文章の方は「ジャングルの中では、いつしか、木のつたやら何やら分からぬもののため、まるで巨大な網にかかったように、右に行っても左に行っても動きがとれなくなった。そんなところへマラリヤ蚊の大群である」とある [1994a：149]。

6) 「私の履歴書 水木しげる」『日本経済新聞』（2003年8月）

⑫「死にたくない」（8月13日）では、ジャングルを一人さまよい、野生の豚との遭遇の様子に続いて、次のような記述がある。

もう中隊への道はわからない。ぼんやり歩いていると、「ぬりかべ」のような巨大な岩がぬつと現れて行く手を阻んだ。不思議な幻想が浮かんでは消えた。夜の闇は濃い。地獄とはこんな所かと思った [2003e：36]。

ここでの「ぬりかべ」は平仮名表記である。多くの読者は妖怪ぬりかべを想像しよう。

7) 『水木さんの幸福論：妖怪漫画家の回想』（2004年3月）

同書第二部「私の履歴書」は、上記「私の履歴書」に大幅加筆されているが、のんのんばあの話として「ぬりかべ」が追加される。先に引用した「べとべとさん」に続き、婆は、「やはり真っ暗い夜道で、突然目の前に壁が現れる。『ぬりかべ』である。慌てず、怖がらず、木の枝を拾って壁の下の方を払うと消えてしまう」と説いている [2004a：39]。

「死にたくない」では、「野生豚」との遭遇の場面が続いて、ぬりかべが現われていたが、ここでも「大幅加筆」がなされている。

歩きつかれ、方向感覚がすっかりうせていた。脚がなえて、よく転んだ。一步も歩けなくなり、そのまま地面にへたり込むように寝込んでしまったこともある。もう中隊への道は分からない。ぼんやり歩いていると『ぬりかべ』のような巨大な岩がぬっと現れて行く手を阻んだ。あれ、と思って座り込んだ。少し眠るとぬりかべは消えていたが、その先には切り立った崖があった。「命拾いしたんだ」と思った。不思議な幻想はその後もう浮かんで消えた。夜の闇は濃い。本当の漆黒である。地獄とはこんな所かと思った。海軍の小隊がいる小屋にたどり着いたのは、偶然の幸運だった [2004a : 92]。

下線部が、6) との共通部分で、部が加筆部分であり、命拾いが強調されているといえよう。

8) 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふう生きてきた』（2004年12月）

第三章「戦争はタイヘンだ」31話中第15・16話は「野生ブタ」「ぬり壁」と続く。後者の挿絵では、おなじみの「ぬりかべ」の姿がジャングルに立ち、水木が両手で押している。「野生ブタ」との遭遇後の文章の方は次のとおりであるが、4) の『昭和史』における水木の独白を微妙に改変した記載となっている。

ジャングルの中を前へ前へと進んだ。しかし、突然、どうしたわけか一步も進めなくなってしまった。ぼくはあまりの意外さに、闇の中に手をあてて押してみた。それはコールタールが少しとけた感じで、押してみると指が入った。ためしに右や左もさわってみたが、それこそ目の前に“ぬり壁”ができたように、ぼくの前に立ちふさがっている。ぼくは急にバカバカしくなってその場に座り込んだ。いっそ寝てしまおうかと思ったが、もう一度さわってみようと思いを伸ばすと“ぬり壁”はもうどこにもなくなっていた。まるで狐につままれた気分になり、ぼくは疲れて寝込んだ。すると今度は、ジャングルのヤブ蚊の大群に襲われた [2004c : 60-61]。

9) 『決定版 日本妖怪大全：妖怪・あの世・神様』（2014年2月）

ここでは「^{ぬりかべ}塗壁」との漢字表記とルビの見出しのもと、「柳田國男の『妖怪談義』によれば、塗壁は筑前（現・福岡県）遠賀郡の海岸に出たことがあるという。夜道を歩いていると急に行く先が壁になり、どこへも行けなくなってしまう」とある。続いて、水木の体験に触れ、次のように記している。

私も第二次世界大戦中、南方で偶然これと同じものに会ったことがある。不意に敵に襲われて、一人暗いジャングルを前へ前へと進んだのだが、あるところで前に進めなくなってしまったのである。押してみるとコールタールを固めた感じのもので、右に行っても左にまわっても前方へ進むことができない。もちろん、前は真っ暗で何も見えない。なおもがむしやりに前へ行こうとするのだが、何としても進めないのだ。途方に暮れるというのはこのことだろう。その場へ腰を下ろして一休みしたのち、私はもう一度進んでみた。すると不思議なことに、今度は何事もなく進むことができたのである。どうやら一服したのがよかったらしい。塗壁という

妖怪の類は、どうやら気が動転したようなときに現れる妖怪のようである [2014 : 534]。

10) 土屋慎吾 『完全版 ゲゲゲのアシスタント』(2016年1月)

かつて水木プロダクションにて水木のアシスタントを勤めていた土屋慎吾は、水木の没後に『完全版 ゲゲゲのアシスタント』を上梓するが、「ぬりかべと霊体験」の部分で、水木がアシスタントたちに、ジャングルでの体験を語る場面が回想されている。

水木：「二日二晩逃げましたね／なにか大きなものにぶつかりました／もうだめだ一歩も歩けん！／わっ！／それは巨大なぬりかべだったんですね」

アシスタントたち：「へえ！ヌリカベに…本当かな…」「ぬりかべって水木さんが創った空想上の妖怪だろ？」「きっとデカイ木にでもぶつかったんだよ」「そうだよなあ」。

水木：「どうゆうわけかトトロと眠ってしまったんですな／あくる日太陽の光がジリジリ照りつけ目を覚ますと／そこは断崖絶壁だったんです／ぬりかべが水木さんを助けてくれたんですね」

アシスタント：「ふう～ん、すごい体験ですね」[土屋 2016 : 131-133]。

以上、10作品における、ぬりかべ像と水木のぬりかべ体験を引用してきた。そこには多様な比喩表現が認められる。1) では、「白いかべがヌーッと立ちほだかり」とあり、2) 以下は、水木の体験が中心となる。その表現には、次のような5段階の変化が指摘できよう。

第一段階（ぬりかべへの言及なし）：初期の2) 5) では、「ぬりかべ」という名称は使用されず、「木のつたやら何やら分からぬもののため、まるで巨大な網にかかったように」と「網」を用いた直喩となっている。

第二段階（壁を用いた直喩）：4) では、「網」に代わって「“ぬり壁”ができたように」という比喩表現が使用されるようになる。ただし、“ぬり壁”とは人工構造物としての壁である。

第三段階（妖怪「ぬりかべ」を用いた直喩）：6) 7) では、『『ぬりかべ』のような巨大な岩」といった比喩表現が使用されるようになる。ここでの「ぬりかべ」に多くの読者は、妖怪ぬりかべを想起するはずである。

第四段階（妖怪「ぬりかべ」との出会い）：3) 10) では「ぬりかべに会った」と表現は直截で断定的となる。

第五段階（「命拾い」の強調）：4) にすでに認められた「命拾い」が、7) 10) でも強調される。

このような流れは、『ゲゲゲの鬼太郎』における妖怪ぬりかべの知名度の上昇に伴うものだったと考えられる。当初、水木には、「妖怪名彙」に取材した遠賀郡海岸部の妖怪を、ニューギニアを舞台に語ることは遠慮や躊躇があったのではなかろうか。この遠慮は、最晩年の辞典、9) に再び見ることができるようである。さらに、4) 『昭和史』掲載の漫画は、後に、『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』第3巻 [2001 : 131-134] に再掲、

さらに『完全版 水木しげる伝』中 [2004d : 131-134] に再々掲されており、数々の描写の中での「定番」と位置付けることができるかも知れない。

ここに描かれた「壁」にも目や手足は認められない。しかし、その表面の様子から、少なくとも筆者は、妖怪ぬりかべを想像してしまう。微妙かつ巧みな表現であり、かつ遠賀郡のヌリカベに取材した事実からすれば、良心的な表現といえよう。

とはいえ、ぬりかべの記載には、実に豊かなヴァリエーションが認められる。ぬりかべ像の素材に注目すると、2) 5) では、「木のつた」「巨大な網」、3) 4) 8) 9) ではコールトールに喩えるが、3) ではその「かわきかけのようなもの」、4) では「少し溶けかけた感じ」、6) 7) では、「岩」となり、8) では再びコールトールが「少し溶けかけた感じ」、9) ではそれを「固めた感じ」と、素材も多様で、素材間ならびに素材内の硬さも一様ではない。

なお、遭遇のタイミングについては〔表1〕に整理したが、2) 5) では、ぬりかべ、マラリヤ蚊、野ブタの順であるのに対し、4) 6) 7) では、野生豚が先に現われている。4) と7) では、その後、切り立った崖に気づき、10) でも同様に語られる。まさに命拾いであるが、3) や9) など歩行を継続したような記載とは、展開を大きく異にすることになる。

表1：ぬりかべ前後の遭遇順

2)	人間に見える木→ぬりかべ→マラリヤ蚊→野ブタ
4)	野生豚→ぬりかべ→ヤブ蚊→断崖
5)	ぬりかべ→マラリヤ蚊→野ブタ
6)	野生豚→ぬりかべ
7)	野生豚→ぬりかべ→切り立った崖
8)	野生ブタ→塗り壁→ヤブ蚊
10)	ぬりかべ→断崖絶壁

様々なヴァリエーションの存在は、水木が意図的に書き分けてきた結果でもあろう。ところが、漫画版『のんのんばあとオレ』（1992年）の記載は以上の諸作品とはまったく異なっている。

11) 漫画版『のんのんばあとオレ』②（1992年）

同書において、水木少年は、美和という7歳の少女と出会う。婆は、美和の家のお手伝いさんとなり、美和に「ぬりかべ」について教えている。水木少年が描き、美和に貸した絵物語を見て「この妖怪はぬりかべだなあ」と語りだすのだが、

夜道を歩いちよと道をふさいでしまう妖怪だ／のんのんばあは子どもの頃これに会ったこ

とがあつてな／前へ行こうとしてもちつとも進まんだ／しかたなく一休みしたらこれがよかつたんだな／不思議なことに何事もなく前へ進むことができたんだが／村の長老に聞いたら気がせいいているときに現れる妖怪で棒で上を払ってもどうにもならんが下を払えば消えるそう
だ [1992b : 138-139]。

対処法までを伝授しているが、「妖怪名彙」にある「棒をもって下を払うと消えるが、上の方を敲いてもどうもならぬ」と見事に一致している。水木は、ここでも、婆に、柳田から得た知識を語らせているのである。

なお、水木の『図説 日本妖怪大鑑』(2007年)の巻末には「現代の妖怪」として、7つの妖怪が挿絵とともに紹介されるが、驚くべきことにその筆頭に「新ぬりかべ」なる妖怪を取り上げ、「よく知られている妖怪『ぬりかべ』は路上に出現し、人の行く手をふさいでしまうものだが、これは家の中に突如として現れる」という。ヌリカベは「妖怪名彙」では、ジャングルの妖怪ではなく「行路」の妖怪であるので、「路上に出現」というのは、原典への敬意であろうか。さらに「よく知られている」とあるのは水木および水木プロの業績に他ならない。繰り返し述べてきたように、ヌリカベは筑前遠賀郡の局地的な妖怪で、民間伝承としての知名度は非常に低い。水木によって人口に膾炙したヌリカベであるが、「新ぬりかべ」とは、「殆どの場合、台所で、冷蔵庫のあった場所に立って」いて「冷蔵庫が妖怪化したものなのだ。器物には霊が宿るといわれているが、現代ではついに、電気製品までもが化けてしまうのである」という [2007 : 334]。時代の変化と場面に応じ、民間伝承上の素材を見事に改変しているのである¹²⁾。

4. 伝承／記憶／文飾／潤色／創作

以上、水木の人生史と民俗学との関係を振り返り、続いて、「のんのんばあ」との関係に注目し、彼女が語ったという諸妖怪を整理し、その出自について検討した。さらに、水木自身が体験したという「ひだる神」「べとべとさん」「ぬりかべ」の記述について、作品間の比較を行い、出典の推測と改変・潤色の様子を辿ってきた。

水木は、のんのんばあが、妖怪に関して非常に豊かな知識をもち、それを水木に伝授してきたかのように繰り返し述べている。これはどこまで正しいのだろう。

彼女が語ったとされる妖怪32名称中、16は石燕による同名の先行作品名であった。そして11名称が『妖怪談義』に記載されていた。前者は江戸の絵師が得た知識であり、後者は、「べとべとさん」や「ぬりかべ」をはじめ、局地的で知名度の低いものが多く、婆の知識とは考えにくいものが少なくない。実際には、先行する研究や作品から水木が得た知識を、婆の知識に添加したと考えられるのである。

足立倫行は、水木(武良)の関係者たちから、境港におけるかれらの少年少女時代の妖怪の知識について聞き取りを行なうなかで、「妖怪やお化けっていうのは、よう覚えとらんね」と同級生の声を聞き、さらに、水木の兄^{そうへい}宗平や弟幸夫でさえ「特に語るほ

どの妖怪体験などない」と語っていたという [足立 1994: 18-19]。一方で、水木の友人の一人は「お化けや幽霊のことは、武良だけがよう言っりました」と語っている [同 1994: 287]。これは、のんのんばあからの影響なのだろうか？ ところが、兄宗平は、婆に関して「彼女はごく普通の田舎の婆さん。際立った能力があるとか、霊的なことに関して特別な知識を持っているとか、そんなことは全然なかった」と記憶しているという [同: 18-19]。ここで、水木の描く「のんのんばあ」と景山ふさ当人とを区別して考える必要が生じてくるようである。

足立によれば、水木の旧友たちに確認しても、狐や狐憑き、河童を除いては、これといった妖怪の名前は出てこずに「幽霊以外の大半の怪異現象は狐の悪戯と看做されていたのである」という [同: 286]。実は、こうした様子は、水木の早期の記載と矛盾しないようである。

小説版『のんのんばあとオレ』（1977年）には、「キツネの嫁入り」「キツネの声」「化けギツネ」といった記載が散見される。水木兄弟の「べとべとさん」との遭遇体験については、先に引用したが、それは「狐狸（キツネとタヌキ）の類の話といえば、こんなこともあった」との前置きに続いていた。カランコロンの足音に脅えながら帰宅した二人は、婆に、「キツネが出た」と報告していた [1977: 124-126]。

これは、当時の子どもたちにとっては標準的な解釈だったと考えられる。足立は、1993年に当時44歳の、境港市役所土地計画課の黒目氏から貴重な聞き取りを行なっている。同氏は、「小学校入学前に祖母からたびたび狐の話を聞かされ」ていたが、「雨の日に野外を歩いていると後ろでベタベタ足音がするが振り返ってみると誰もいない、祖母によればそれは狐が騙したのだという。下ノ川の近くに行くといろいろ不思議な出来事に出遭う、狐が棲んでいるせいだ、と」 [足立 1994: 286]。まさに「べとべとさん」に相当する現象だが、狐の仕業と説明されていたのである¹³⁾。

水木は、こうした境港のキツネ一色の妖怪世界を、多彩なものへと書き換えてきたようである。いや、もしかすると逆の流れ、他の妖怪の忘却に伴い、不可解な現象がことごとく狐の仕業に収斂したという可能性も存在しよう。

いずれにせよ、先の「武良だけがよう言っりました」の一言は貴重である。幼少期からの奇行、収集癖、そして、観察力と画才、水木の感受性や感性は際立って個性的であったといえよう。水木は、「普通の田舎の婆さん」から、優等生であった兄とは異なる刺激を受けていたのではなかろうか。

諸作品を見ると、のんのんばあは臨機応変、特に教訓的に、妖怪について語っていたことが分かる。水木は「家を清潔にしておくようになどという教訓話が、いつの間にか妖怪談義につながるものがよくあった」と記している [2004a: 39-40]。特に水木のような悪戯好きの食いしん坊には、いくつものしつけや教訓が必要だったはずである。しつけや教訓は、比喩表現を伴うことが多い。比喩といえば、水木のぬりかべ体験におい

て、当初は直喩に使用されていた壁や塗り壁がやがて妖怪ぬりかべに転じていた。比喩の実在化という現象が、妖怪生成の一因であったといえないだろうか。幼い水木が食すには大きすぎた鬼のようなサザエがサザエオニになるという展開 [1977:47-48] である。

さらに、水木は、小学生時代を振り返り、『のんのんばあ』の仕込みに加え、自分でも勉強を怠らず、妖怪や死後の世界に関する蘊蓄も誰にも負けなかった」と述べている [2003c: 36]。水木による情報の追加はすでにこの当時から行われていたようである。

繰り返しになるが、婆が語ったとされる妖怪32名称中、婆が実際に語ったと考えられる妖怪数は、計算上では、8名称を超えない可能性がある。しかし、名称と現象は別物であり、妖怪に相当する現象には多数の同物異名 (synonym) と同名異物 (homonym) が混在している。ひだる神にも、ダルツク・ダリ・タリ・ガキ等々の synonym があり [梅野 2000: 426]、文福茶釜には、狸に限らず狐版の homonym が存在する。名称を石燕や柳田から借用したであろう妖怪24名称の中には、婆が、現象あるいは類似現象として知っており、別の地方名で水木に語っていたものを、水木が、柳田や石燕が用いた見出し語に置換したという例があるのではなかろうか。特に、石燕からの借用は、絵画化には都合がよかったものと考えられる。

もちろん、ぬりかべなど局地的で類例の少ない妖怪は、明らかに水木による追加と考えてよいだろう。その際、疑問に思われるのは、恩人たる、のんのんばあの知識に他の知識を接合し、婆にぬりかべ体験をさせることなどに抵抗や躊躇はなかったのかということである。同じことは、『妖怪談義』等の情報の大幅な改変にもいえそうである。

この点で、筆者は、水木には、三枚のお札ならぬ免罪符が用意されているように考える。

一枚目の免罪符は、水木が、のんのんばあとの間に「転生」を語っていることである。二人を一体化させる、あるいはそう信じ込むことで、彼我の知識を一体化、あるいはそう信じ込むことが可能となろう。

二枚目は、シャーマニスティックな、少なくとも神秘的な装いである。水木は、シャーマニズム研究の大家、佐々木宏幹との対談において、水木自身の作画時におけるシャーマンの性格を佐々木に指摘させている [水木・佐々木 1998: 22-23]。さらに、宮田登との対談では、「何か外側の力に描かされているという感じが半分以上あるんです」と訴え、「それは託宣と同じですね」と宮田に語らせている [水木・宮田 1998: 188]。

しかし、神秘的な現象とされるシャーマニズムには、実際には操作的な側面を認めることができる。例えば、沖縄本島の位牌祭祀に関するユタ (シャーマン) の助言がユタ自身の利益につながるように操作されることが指摘されている [喜山 1987: 155-161]。また、筆者自身も、台湾先住民の祖先祭祀に関して、シャーマンの託宣に、シャーマンや依頼者のもつ系譜知識が投影されることを確認している [蛸島 2002: 202-203]。水木もまた、シャーマン的な装いを示しながらも、几帳面な取材と緻密な脚色の

もと、豊かな既存資料を最大限に活用してきたものと考えられるのである。

のんのんばあをして多数の妖怪を、しかも様々な作品で多様に語らしめるには、緻密な計算が必要だったはずである。同じことは、『妖怪談義』に取材した、ひだる神、ベとべとさん、ぬりかべの多様な描き方にも認められよう。

三枚目の免罪符は、いうまでもなく、水木が作家であり漫画家であることである。潤色や創作こそが生活の糧となる。従って、筆者は、彼に研究倫理などを問うつもりはないし、むしろ、ひだる神との出会いの記載や、ぬりかべ体験の記述方法の推移などから、部分的には、先行研究への配慮を忘れていないことも確認できたと考える。

ところで、知識や記憶に潤色や創作を加えるのは漫画家や作家だけだろうか？民間伝承の多くは詠み人知らずの創作ともいえよう。とくに妖怪譚は可視化しにくく、記憶も変化しやすいものと考えられる。さらに、針小棒大に語られがちである。水木作品の比較検討から得られた視線を、既存の資料の再考に向けてみることも有益であるかも知れない。地方名をヒダル神に書き換えたのは水木だけではないかも知れないのである。

注

- 1) 以後水木作品からの引用が頻繁に繰り返されるので、水木作品に関してのみ〔 〕内の著者名を省略する。
- 2) 大塚英志は、『妖怪名彙』の項目の貧弱さとその背景について、柳田の関心の推移やカードの所在等に注目し、興味深い指摘と推測を行なっている〔大塚 2003：129-133〕
- 3) 井之口は第五巻の索引に見る名称を数え上げたと考えられる。
- 4) 本稿では「のんのんばあ」について繰り返し触れることになるが、平仮名6文字では読みにくいという難がある。そこで、適宜「婆」と呼ぶことにするが、差別的な意図は一切ないことを付言しておきたい。
- 5) 水木の評伝の著者足立倫行の調査によると、一畑薬師教団の信徒は祈祷師めいた活動は行わず、境港で「拌み手さん」と呼ばれるのは修験者だったという〔足立 1994：293-295〕。足立のインタビューに対し、水木も、そのじいさんが、“拌み手”の仕事をしているところは一度も見ておらず、「托鉢に出るのを見たことがあるだけです」と回答している〔同：303〕
- 6) 宮田 登は水木との対談で、「学校教育が水木さんの描かれた、自然とお互いにコミュニケーションしているような妖怪『のんのんばあ』の世界をつぶしていったのは間違いない」と指摘している〔水木・宮田 1998：190〕。
- 7) 「みずち」は正しくは「蛟」であろうが、講談社漫画文庫版〔1997：44〕でも「蛟」のままである。
- 8) 「妖怪名彙」では「キツネノタイマツ」の見出しのもと、中央部での地方名として「狐の嫁入」を挙げている〔柳田 1956：233〕。
- 9) 小児に対する化物の呼称として肥後玉名郡のワワン、薩摩のワンを挙げている〔同：53〕。
- 10) 文庫版の記載も一字一句変らない〔1990：209-210〕

- 11) 以下、漫画からの引用においてコマあるいは吹き出しをまたぐ箇所を「／」で区切り、また、台詞のスペースや改行部分に「、」を追加することにした。
- 12) 同書の掲載内容の多くは、『決定版 日本妖怪大全：妖怪・あの世・神様』（2014年）に再録されているが、「新ぬりかべ」は掲載されていない。
- 13) 「ぺたぺた」という足音が注目される。先に筆者は、下駄の音が1930年当時の境港に相応しい潤色であろうと述べたが、ここでは「雨の日に」とあるので、ゴム長靴の音であるのかも知れない。

文献

足立倫行

1994 『妖怪と歩く 評伝・水木しげる』 文芸春秋

井之口章次

1975 『日本の俗信』 弘文堂

梅野光興

2000 「ひだる神」 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編
『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館：p.426

大塚英志

2003年3月 「妖怪名彙＜裏＞」 『怪』14巻 角川書店：pp.128-133

大藤時彦

1943 「ヒダル神」 『民間伝承』第9巻第1号 民間伝承の会：pp.17-20

関東水木会・平林重雄編

2005 「水木しげるの詳細年譜」 水木しげる 『完全版 水木しげるの伝』下 講談社漫画文庫：
pp.479-513

喜山朝彦

1987 「位牌祭祀の操作的側面：沖縄本島東村の事例」 『社会人類学年報』Vol.13 東京都
立大学社会人類学会：pp.151-161

蛸島 直

2002 「プユマ族のカルマハンと知識：系譜の認識機構を中心に」 『台湾原住民研究』6：
pp.179-206

土屋慎吾

2016 『完全版 ゲゲゲのアシスタント』 私家版

常光 徹

2016 「追悼 水木しげる氏」 『日本民俗学』285号：p.163

鳥山石燕

2005 『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』 角川文庫

水木しげる

1973 『総員玉碎せよ！！－聖ジョージ岬・哀歌－』 講談社

1974 『小学館入門百科シリーズ32 妖怪なんでも入門』 小学館

1975 『娘に語るお父さんの戦記』 河出書房新社

1977 『のんのんぱあとオレ』 ちくま少年図書館

1980 『ゆうれい電車』 ポプラ社

- 1981 『水木しげるの妖怪事典』 東京堂出版
1982 『ねばけ人生』 筑摩書房
1984 『水木しげるの続・妖怪事典』 東京堂出版
1988 『水木しげる 昭和史』第1巻 講談社
1989 『水木しげる 昭和史』第5巻 講談社
1990 『のんのんばあとオレ』 ちくま文庫版
1991 『日本妖怪大全』 講談社
1992a 漫画版『のんのんばあとオレ』①わんぱく大戦争の巻 講談社
1992b 漫画版『のんのんばあとオレ』②妖怪に好かれた落第王の巻 講談社
1994a 『水木しげるのラバウル戦記』 筑摩書房
1994b 『図説 日本妖怪大全』 講談社
1994c 『続・日本妖怪大全』 講談社
1995 『トペトロとの50年』 扶桑社
1997 『のんのんばあとオレ』 講談社漫画文庫
1998 『ほんまにオレはアホやろか』 社会批評社
2001 『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』全6巻 講談社
2003a 「神秘家列伝 柳田国男」『怪』14巻 角川書店 pp.15-99
2003b 「私の履歴書③のんのんばあ」『日本経済新聞』8月3日：p.36
2003c 「私の履歴書④一年遅れの入学」『日本経済新聞』8月4日：p.36
2003d 「私の履歴書⑤天才少年現る」『日本経済新聞』8月5日：p.36
2003e 「私の履歴書③死にたくない」『日本経済新聞』8月13日：p.36
2004a 『水木さんの幸福論：妖怪漫画家の回想』日本経済新聞社
2004b 『完全版 水木しげるの伝』上 講談社漫画文庫
2004c 『水木しげるののんのん人生：ぼくはこんなふう生きてきた』大和書房
2004d 『完全版 水木しげるの伝』中 講談社漫画文庫
2005 『完全版 水木しげるの伝』下 講談社漫画文庫
2007 『図説 日本妖怪大鑑』 講談社
2014 『決定版 日本妖怪大全：妖怪・あの世・神様』 講談社文庫
- 水木しげる・佐々木宏幹
1998 対談「大シャーマンが現代を癒す」 季刊『怪』第1号 角川書店：pp.20-29
- 水木しげる・宮田 登
1998 対談「霊を描くシャーマン」 季刊『怪』第2号 角川書店：pp.182-191
- 柳田国男
1938 「妖怪名彙」(4)『民間伝承』第4巻第1号 民間伝承の会：p.12
- 柳田国男
1956 『妖怪談義』 修道社
- 柳田国男
1989 (1925)「ひだる神のこと」『柳田国男全集』第6巻 ちくま文庫 pp.113-116

